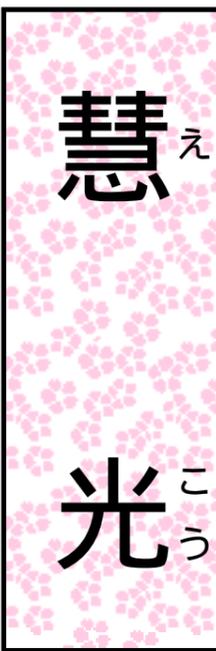




満開の白梅

(当山境内地・3月7日撮影)



金光寺寺報
第189号
発行所 金光寺
宮崎県西臼杵郡
五ヶ瀬町大字鞍岡
5927番地
0982
83-2338

今月のことば

いちねんきょう き おうじょう
一念慶喜するひとは 往生かならずさだまりぬ

3月の法語は、『浄土和讃』の第二十六首の後半二句です。

若不生者のちかひゆゑ
信楽まことにときいたり
一念慶喜するひとは
往生かならずさだまりぬ

(「もし生まれることができないようなら、さとりを開かない」と本願に誓われているので、真実の信心を得たまさにそのとき、本願を信じ喜ぶ人は、浄土に往生することが間違いなく定まるのである。)

後半二句では、真実信心が得られたその瞬間に湧きおこる喜びとともに、その時にさとりの世界であるお浄土に往生することが決定しているということが見事に詠われています。

親鸞聖人は、「易行道とは、ただ仏を信じて浄土の往生を願えば、如来の願力によって清ら

かな国に生れ、仏にささえられ、ただちに大乘の正定聚に入ることができることをいう。正定聚とは不退転の位である。これをたとえていえば、水路を船で行けば楽しいようなものである」と述べられます。ここに龍樹菩薩の示される「易行道」を受けられて、曇鸞大師は「信仏の因縁」(阿弥陀さまに任せきるといふ信)によって浄土往生を願えば、「仏願力に乗じて」「大乘正定の聚」に入ると示されます。

阿弥陀仏の本願のはたらきに乗せていただくと、「大乘の正定聚」として「浄土に往生してさとりを得る身となる仲間に入る」ことができるのです。それは、この世を去る時のことではなく、いま現在において「往生成仏する身に決定している仲間」となる、すなわち「現生正定聚」を意味しているのです。

(本願寺出版社刊「大乘」誌より転載)

仏事お休みのお知らせ

下記の日は緊急を除き、仏事は行いません。ご協力をお願いします。

3月 24日(金)~25日(土)
31日(金) 午後
4月 3日(月)~5日(水)
6日(木) 終日
15日(土) 午後
~16日(日)
5月 14日(日) 終日
22日(月) 終日
6月 24日(土) 午後
25日(日) 終日

2月、次の金光寺門信徒の方がご往生なさいました。謹んでお悔やみ申し上げます。

2017年 2月 2日寂 満91歳
大石の内 甲 斐 ミツエ 様
2017年 2月 6日寂 満103歳
折立 那 須 信 様

ホームページ開いています。
URL <http://konkhoji.jp/>
3月8日現在 アクセス数 78,779人

仏事のご縁でビックリ。お斎(とき)をいただいていると波帰の鶴田時義さんが「孫が楽天ゴルフ大会で6位指名を受け入団した」とおっしゃいました。早速、帰ってホームページを見てみると「鶴田圭祐」と氏名があります。背番号は61。今度一刻も早い一軍デビューを果たしてもらい、その雄姿をテレビで見たいものです。ハイランドスキー場で五ヶ瀬夜間イベントの書き込みを見てビックリ。人知れずイベントが行われたことも漏れる灯に映る白銀の美しさ、遠くに見える熊本方面の夜景の美しさにビックリ。経営面でも同時に思わすつとると聞くスキー場。こんな素晴らしい宝物を経営面に生かさない手はないと思います。実現は難問もあると思いますが、何とかクリアして夜間スキーを現して欲しいなと思えました。(住職 松井卓郎)

住職ひとりごと

仏教用語豆辞典

人間

普通、人間とは、ひととか人類、人物とか人がら、人の住む所とか世の中を意味しています。人間をジンカンとは読まずに、多くニンゲンと読むのは、人の

世界という意味の仏教語だからなのです。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天という六つの世界に、生死を繰り返すことを六道輪廻といいますが、その一つの世界が人間なのです。織田信長が今川義元との桶狭間の合戦に先立って、「人間五十年、下天の内には比ぶれば夢まぼろしの如くなり」と、謡いながら舞う名場面があります。この「敦盛」という謡曲の名文句のもとになってるのは『俱舍論』の「人間五十年、下一昼夜」の文です。

下天とは、仏教宇宙観でいうと、須弥山中腹の四方にある四天王のことで、この一昼夜は、人間の世界の五十年に相当するといふのです。決して、人生わずか五十年といっているわけではありません。皆さん、遠慮しないで、長生きをしてください。

(本願寺出版社発行 辻本敬順著
「仏教用語豆辞典」一〇〇 PART 1 から)

葬儀と和讃

先月から葬儀関連の仏事でつとめる和讃について掲載を始めました。今月は通夜勤行でつとめる和讃のお示しを皆さんとともに味わいたいと思います。

通夜勤行

(原文)
生死の苦海ほとりなし

ひさしくしづめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ
のせてかならずわたしける

(現代語)

苦しみに満ちた迷いの海はどこまでも果てしなく続いている。その海に長い間沈んでいるわたしたちを、阿弥陀仏の本願の船だけが、必ず乗せて浄土に渡してください。

(原文)

恩愛はなはだちがたく
生死はなはだつきがたし

念仏三昧行じてぞ
罪障を滅し度脱せし

(現代語)

…親しいものへの情愛を断ち切ることも、生れ変わり死に変わりし続ける苦しみを取り除くこともできなかった。他力の念仏を修めてはじめて罪のさわりを滅し、迷いの世界を抜け出すことができたのである」といわれている。

この二首を通夜勤行のときに『仏説阿弥陀経』をつとめた後に添えます。

通夜勤行のおつとめは、本

山発行の葬儀法式規範では『仏説阿弥陀経』『正信念仏偈』のいずれかと定めてあるのですが、私は『仏説阿弥陀経』をつとめています。

通夜勤行は葬儀の前夜につとめます。この夜は、故人の遺体が存在する最後の夜であり、故人にとって最後の夕方

事(夕べの勤行)の意味をもちます。家族はもちろんこれまで一度もその機会のなかった知人、友人もせめてこの夜は故人とともに夕事をおつとめるのです。

さて、一首目の和讃で、我がはからいで抜け出すことのできない迷いの娑婆世界から阿弥陀仏のご本願によつてしか私たちが救われていくことができないことをお示しくさせていただきます。

そして、二首目、お通夜のご縁の中で、改めて親しい人との情愛を断ち切ることに、迷いの世界を抜け出すこと、そのいずれもできないことを明らかにし、しかし、まことのお念仏によつて必ずお浄土に参らせていただくことを示されます。お浄土へ救われるということは「俱会一处」の世界が恵まれるということ、それは親しい人といつか再び会うことができます。臨終の一念に仏となられた故人のお導きのお夕事とい

だきたいものです。次回は葬場勤行の和讃になります。

(和讃二首の原文・現代語については、紙面の都合上字体を小さくしました)

お通夜・葬儀の際に参列された方々が読経中に焼香されます。その際、焼香後の遺族・親族に対しての礼が必要かという質問を最近二度ほど受けました。結論を申し上げますと必要ありません。通夜・葬儀会場に入り、ご遺体を前にしてまず焼香し、その後、遺族・親族にお悔やみを申し上げますので、それで、礼は終了しています。遺族・親族は身近な方と死別し、悲しみの中に通夜・葬儀をおつとめになつていきます。心中は身近な方を偲ぶ心でいっぱいなのです。そこに、参列者の礼を受けると返礼をしなければならなくなり、必ずしも必要ではないのですが、遺族・親族の心中を思い、静かに故人を偲ぶことができるように心がけたいものです。

法語の世界

〈原文〉

前々住上人(蓮如)仰せられ候ふ。一心決定のうへ、弥陀の御たすけありたりといふは、さとりのかたにしてわろし。たのむところにてたすけたまひ候ふことは歴然に候へども、御たすけあらうとてしがるべきのよし仰せられ候ふ云々。一念帰命の時、不退の位に住す。これ不退の密益なり、これ涅槃分なるよし仰せられ候ふと云々。(蓮如上人御一代記聞書 二百四)

〈現代語訳〉

蓮如上人は、「信心がたしかに定まったのだから、弥陀のお救いをすでに得たというのは、現在のこの身でさとりを開いたように聞こえるのでよくない。弥陀を信じておまかせするとき、お救いくださることは明らかであるけれども、必ずお救いにあずかるというのがよいのである」と仰せになりました。また、「信心をいただいたとき、往生成仏すべき身となる。これは必ず成仏するという利益であり、表にはあらわれない利益であつて、仏のさとりに至ることに定まったということなのである」とも仰せになりました。

法事日時について

法事の日時について、ご連絡をいただいた順に日程を決めています。希望の日時がありましたら、早目にご連絡ください。

なお、年回忌法要はお命日を過ぎてつとめても大丈夫です。

初盆会の日程について

毎年、初盆会にご連絡を頂いた順に日程を決めています。本年初盆をお迎えするお宅で、時間を決めて法要後のお斎をお考えのところは早目にご連絡ください。

なお、下記は日程が決まっています。

記

8月13日 10時、11時、12時、13時

8月14日 11時、12時、15時

二〇一七年春季彼岸会法要のお知らせ

日時 三月二十日(月) 午前九時三十分

場所 金光寺本堂

勤行 正信念仏偈(草譜) 六首引き

講師 浄光寺(下野)衆徒 寺 専 慈 師

その他 経本・念珠・式章をご持参ください。

法要終了後仏教婦人会総会を開催します。